

シリーズ「語りえぬものを問う」国際シンポジウム

語りえぬものを問う I

——エドガール・モランと現在あるものの社会学——

S'interroger sur l'implicite I – Edgar Morin et la sociologie du présent

2005 年 9 月 25 日（日）

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス 関西学院会館

共催：日仏社会学会、日本社会学史学会

〈講演〉

エドガール・モラン (Edgar Morin) (社会学者)

「プロゼヴェットでの調査について」

ベルナール・パイヤール (Bernard Paillard) (フランス国立科学研究センター主任研究員)

「プロゼヴェット 方法論的指標」

ジャン=クロード・シュトゥルム (Jean-Claude Stourm) (プロゼヴェット地区顧問)

「プロゼヴェット調査と住民の経験」

古川 彰 (関西学院大学大学院社会学研究科教授)

「出来事と経験——琵琶湖 1980–84 共同調査から」

佐藤 俊樹 (東京大学大学院総合文化研究科助教授)

「プロゼヴェットの方へ、オルレアンの方へ

——社会学と社会調査における歴史—物語(history-story)の二つの顔」

〈司会・統括〉

荻野 昌弘 (関西学院大学大学院社会学研究科教授)

国際シンポジウム「語りえぬものを問う Iーエドガール・モランと現在あるものの社会学」報告

市民と専門家の協働としての社会調査

雪村 まゆみ*

キーワード：社会調査、方法、協働、実践、市民

2005年9月25日（日）、関西学院大学上ヶ原キャンパス関西学院会館において本 COE の 2005 年度第 1 回国際シンポジウム「語りえぬものを問う Iーエドガール・モランと現在あるものの社会学」が開催された。午前 10 時から午後 6 時までの長時間にわたり、また、昼休憩にはプロゼヴェット特産の缶詰のボークパテとシードルが紹介されるなど盛大に行われた。エドガール・モラン氏の来日は諸事情により実現されなかったが、本シンポジウムのためにパリにて撮影されたモラン氏のインタビュー映像が上映された。モラン氏は、社会学者として著名なことはいうまでもないが、その著作はいずれも社会学の枠にとどまらない学際的な著作と評され、日本語にも数多く翻訳されている。本シンポジウムでのモラン氏のインタビューは 2 部に分かれており、前半は主にプロゼヴェット調査での経験について、後半は現在モラン氏が主宰している「科学と市民」プロジェクト（Sciences et Citoyens）についてであった。次いで、午後の部ではモラン氏の調査グループで 1965 年のプロゼヴェット調査に参加したベルナール・パイヤール氏が登壇し、プロゼヴェットの方法論的指標として、「調査員の 10 の掟（Les dix commandement de l'enquêteur）」について講演されたほか、プロゼヴェット調査の方法論と関連させ、古川彰氏、佐藤俊樹氏から日本における社会調査について講演が行われた。また、討論では、プロゼヴェット地区顧問（当時は中学校教諭として調査に協力した）ジャン＝クロード・シュトゥルム氏も登壇し、当時の

*関西学院大学

プロゼヴェットの市民の視点からモランの調査グループの方法について言及した。

本報告では、登壇者の顔ぶれからも明らかであるが、社会を分析する専門家としての社会学者と調査される村の住人の協働として社会調査を捉えた。このアイデアは、後に展開されるモランの著作『方法』[Morin, 1977=1984]における社会関与（intervention social）という調査方法、および調査自身を研究するという原則を念頭においている。以下では、パイヤール氏、古川氏および佐藤氏の講演を「方法」、「市民と専門家の協働」という観点から紹介したい。

パイヤール氏にとって、プロゼヴェット調査は若い社会学者としては異例の経験であり、その調査方法は、当時の社会学において一般的な方法ではなく、民族学、文化人類学、社会心理学、ジャーナリストによって考えられたあらゆる方法が融合しており、パイヤール氏の言葉を借りれば「生きた方法」であった。方法論的指標のなかでもとりわけ重要なのは、調査対象領域の問題である。従来、社会調査では、事前に対象地域を限定し遂行されていたが、その対象が地理的歴史的に大きな流れのなかに位置づけられるという観点から、限定的に捉えるべきではないということである。つまり、本来は、個別のものと普遍的なもの、現象的なものと根本的なもの、あるいは経験的なものと理論上のものの間にある恒常的な緊張を体験、分析することによって初めて、具体的な事例において普遍的な問題を提起することができ、そこから一般的考察が導出されるという（『プロデメの変貌』[Morin, 1967=1975]においても、コミュニンの空間的変動を「過去——現在——未来」といった時間の流れのなかに位置づけ、「できごと」とおして空間と時間を交差させ、「現在」進行中の社会変容を把握しようとした）。

また、古川氏は、モラン氏らのプロゼヴェット調査における現象記述的方法とインタビューの方法から生み出された「出来事社会学」というアイデア、「住民との協働」という理念と対比するかたちで知内村調査の経験とそ

こから生み出された生活環境主義というアイデアについて報告した。ここでは、西欧近代にルーツをもつ合理的で論理的な近代の認識法を持たない日本の農村における環境保全の実践について、村の住人による村の調査という観点から述べられた。知内村では260年にわたって書かれ、今もなお書き続けられている「記録」と名づけられた文書があり、それが村で起こった出来事の記録として、村にかかわる出来事のインデックスの役割を果たしているという。その意味では、村が何百年にもわたって自分たちの村の調査を行い、データを蓄積するという営みが行われているといえる。この「記録」から知内村もまた、プロゼヴェットが近代化の過程にあったように、変化のなかにあったことがわかるのである。

一方、佐藤氏は、比較社会学、歴史社会学の観点から人々の語りあるいは調査のデータにでさえ、しばしば事実でないこと、根拠がないこと、あいまいなことなどが含まれ、必ずしも正確なことばかりではないことについて言及した。とりわけ、佐藤氏は日本人には非常になじみの深い「桜」にまつわる言説の分析をとおして、そのなじみの深さゆえに生じる「桜」言説の不確かさについて述べた。また、プロゼヴェット調査の方法論に言及し、対話あるいは観察、実践、介入、浸透といったプロセスで対象をより深く理解するというだけでなく、対象者それぞれが紡ぐ言説間で見られる絶妙な対立、干渉、緊張をひとつの客観的な事実として再構成する技術が、現在われわれが調査、分析するうえで重要になることを指摘した。

ここで論点となった、調査において市民と専門家がいかに協働可能か、という問いはモランが後半のインタビューで語った「科学と市民」プロジェクトにおいて検討、実践されている。このプロジェクトは政治や経済の領域を含んだ同時代的な問題に取り組んでいるが、その根底にあるのは科学技術の革新によって専門知が閉じられたものになればなるほど、これらの問題は市民にとってますます理解困難なものとなってきたという意識である。モラン氏は市民がさまざまな知識を身につけるだけでなく、知識自体がみずか

ら変化する必要性を唱えている。

最後に統括として、荻野氏より、ひとつの社会が変化する過程で、変化が阻まれる領域と変化が促進される領域があるという点では、フランスも日本も共通しているが、いかなる領域でそうであるのかについては社会によって異なるということが指摘された。たとえば、フランスにおいては、プロゼヴェットのような地方の村においてもフランス革命以降、革新派と保守派の対立が社会構造を維持しているのに対して、知内村では、政治的なイデオロギーが村の社会構造を維持するというわけではなく、むしろ、個人の政治的立場が豹変するという事態がしばしば起こる。知内村においては、環境維持たとえば用排水の問題をとおして構造が維持されるというように、社会によって社会構造の変化／維持の争点が異なるのである。

本 COE において、「社会調査」が重要なキーワードであることはいうまでもないが、方法論の考察と経験的な調査研究は不可分であるという観点からみても、モランの『プロデメの変貌』から『方法』への一連の研究は今なお斬新で得るところが多い。また、現在進行中の「科学と市民」プロジェクトは、本シンポジウムにおいて「市民と専門家の協働」という論点を導いた。つまり、村が村自身を知る（調査する）という実践と、社会学者が村という共同体を知る（調査する）という実践が互いに協働することの重要性が指摘される。これは誰のために調査が行われるべきか、という問題を含意し、「社会調査」の成果が社会に還元され、人々の幸福を追求するツールとしての「社会調査」の実践であるといえ、「人類の幸福に資する社会調査」を考える上で重要な切り口といえる。

文献

- Morin, Edgar, 1967, *Commune en France : la métamorphose de Plodémet*, Paris : Fayard. (=1975, 宇波彰訳『プロデメの変貌——フランスのコミュン』東京：法政大学出版局.)
- , 1977, *La nature de la nature*, La Méthode ; 1, Paris : Seuil. (=1984, 大津真作訳『方法』東京：法政大学出版局.)